『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(三)

植木久行

●一〇四番　白居易「峽中の石上に題す」「巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉」

○元和十四年（八一九）三月、作者四八歳、忠州（四川省忠縣。三峽の上流にある。六七番參照）へ刺史として赴任する途中の作（花芳・朱）。柿村『考證』に、「峽中は巫峽の中なり」とある。巫峽とは、一般に湖北省秭歸縣付近から上流の巫山付近に至る峽谷を指す。[1] 後述する巫女廟や昭君村の位置を考えれば、『考證』の說は妥當であろう。王拾遺『白居易傳』（陝西人民出版社、一九八三年、一六九頁）には、巫山についたとき、神女廟を參拜し、詩を峽中の石に題きつけたとする。ちなみに、白居易が江州（江西省九江市）司馬から忠州刺史に昇進したのは、舊友の宰相崔群の盡力による。

○〔巫女廟〕　二句は、「巫女廟の花や昭君村の柳を、巫女の紅粉、昭君の翠眉に比して形容した」もの（柿村『要解』）。巫女廟とは、楚の襄王[2]との雲雨の契りで知られる巫山の神女をまつる廟の名。神女廟・神女祠・朝雲廟・神女館・巫山廟などともいう。神女峰（巫山十二峰の一）の對岸にあって、正面に巫山の峰々を望む（南宋の陸游『入蜀記』卷六、十月二十三日の條）。つまり、巫女廟は長江の南岸にあった[3]（巫山十二峰はすべて北岸）。その壁に題された詩は、唐代、すでに千首を超えたという（唐の范據『雲谿友議』卷上、巫詠難の條）。

○〔紅似粉〕　二句は對句であり、「似」は下句の「於」と對をなす比較の助字。前掲の七五番參照。したがって、語法的には「紅にして粉に似たり」（川口・大曾根本）ではなく、「粉よりも紅なり」と讀むべきであろう。[4]『私注』に「似」と送り假名をつけるのが正しい。これは、柿村『考證』、佐

久注、水野平次『白樂天と日本文學』（目黒書店、一九三〇年）、内田泉之助『白氏文集』（明德出版社、一九六六年）などがみな從う通説でもある。川口本は、七五番では「似」を「よりも」と讀みながら、本詩では讀まない。ただし、譯は「紅粉よりも濃い紅だ」と、比較に譯す（大曾根譯も比較に譯す）。ところが、川口『文庫』本は、「あざやかな紅色で、美人が愛用するほお紅の色に似ています」と譯す。「似」を類似の意に改譯したのは理解できない。

(5) ○〔粉〕　粉には白粉と紅粉（朱粉・經粉）の二種類があり（『倭名類聚鈔』巻一四、容飾具）、ここでは紅粉を指す。『抄注』に「粉ハ、ヘニ也。女ノ廟ニアル花ナレハ、紅粉ニヨソヘタル也」とある。後漢の劉熙撰『釋名』巻四、釋首飾、經粉の條には、「經は赤なり。粉を染めて赤からしめ、以て頰の上に著くるなり」とあって、參考になる。また平野彦次郎『唐詩選研究』（明德出版社、一九七四年）には、初唐の杜審言「蘇絢書記に贈る」詩の「紅粉樓中　應に日を計るべし、燕支山下　年を經ること莫れ」とある「紅粉」について、

紅花（ベニバナ）の液を粉に和して顔に付ける化粧具。これを紅（ベニ）と粉（オシロイ）との二物とするのは誤り。

と注する。そして、對句構造から考えて「紅粉」を一物（紅なる粉）として用いたものを六例あげる。いま、その二例を參考に供する（送り假名は省略）。

汗輕紅粉濕　　坐久翠眉愁　　梁、元帝（「詠歌詩」）

青樓曉日珠簾映　　紅粉春妝寶鏡催　　孟浩然（「春情」）

とくに元帝の紅粉・翠眉の對句は、本詩の先行例としても注目される。

なお、晉の崔豹『古今注』巻下、草木・燕支の條には、「中國の人は、これを紅藍と謂ふ。以て粉を染めて面色と爲し、謂ひて燕支粉と爲す」という。昔から紅藍の產地は今の甘肅省にある燕支（＝焉支）山付近とされ、「涼州（甘肅省武威付近）の緋色は天下の最」と評された（『魏書』巻二六、尉古眞傳に付す聿の條）。燕支・焉支は、本來、紅藍もしくはその染料の外國名を表す假借字らしい。紅藍の栽培と染色方法は、すでに北魏の賈思勰『齊民要術』巻五、種紅藍花及梔子の條に詳しい。志田不動麿「支那に於ける化粧の源流」（『史學雜誌』第四〇巻九號、一九二九年）は、今もなお參照に値する。

○〔昭君村〕　王昭君は、前漢の元帝（前四九～前三三年在位）の後宮にいた王嬙（おうしょう）（檣）のこと。大曾根注参照。昭君の生地は、今の湖北省興山縣城の南郊にある寶坪（ほうへい）村。巫女の廟よりは下流で、長江の北岸にある。したがって、白居易はまず舟を秭歸に停めて昭君村を訪れたらしい（王『系年』一三四頁）。現在もなお、昭君井・昭君臺などの遺跡が殘り、講談社・中國人民美術出版社『新中國の旅⑤』（一九八六年）八三頁には、鮮明な昭君宅の寫眞を收める。國家文物事業管理局主編『中國名勝辭典』（上海辭書出版社、一九八一年）七五八頁以下、湖北人民出版社編・刊『湖北名勝』（一九八六年）一六頁以下、李文芳編著『中國名勝索引』（中國旅游出版社、一九八七年）五九六頁以下など參照。

○〔翠〕　唐代流行した翠黛（綠眉）の翠と翠柳の翠を比較する。當時の眉ずみは、インディゴ（インド產の植物から取った染料）やラピス・ラズーリ（青金石。アフガニスタン東北を主產地）を材料とした螺黛（らたい）（圓錐形の黛のかたまり）であったらしい。[6]「翠」は、つややかな深い感じの色あいをいう。鈴木修次『人生有情―警策のことば』（東京書籍、一九七七年）の「空翠・綠陰・翠陰」の條にいう、

「綠」は、こいみどり、こくのあるみどり、エネルギーがこもったみどりをいい、それに對して「翠」は、さわやかなみどり、みずみずしいみどり、におうみどり、ゆらめくみどり、といった感覺を示そうとするようである。「綠水」「綠野」「綠林」が、「綠」の代表的語彙になるのに對して、「翠微」「翠嵐」「翠靄」などの語彙が、「翠」の感覺をよく生かしたものになる。

●一〇五番　白居易「峽中の石上に題す」「誠知老去風情少、見此爭無一句詩」

○一〇四番の詩の轉・結句。

○〔風情〕　ものごとに對する感動・關心・興味など。白居易「夢得を憶ふ」詩（卷26、後集卷11）に、「年長じて風情少なく、官高くして俗慮多し」とある。

○〔少〕　ほとんどない意。六五番參照。

○〔爭〕　「どうして…」と反語に用いる。太田辰夫「唐代文法試探」（『中國語史通考』白帝社、一九八八年所收）によれば、詩に多用されるが、初盛唐期にはきわめて稀で、晚唐五代の作家に多いという（十四人の詩人の例を一つずつあげる）。「怎」とほぼ同義の白話的表現。[7]宋代の人は怎を用い、唐代では爭の字のみを用いたとされる（張相『詩詞曲語辭匯釋』卷

二、爭(二)の條)。また、内田道夫「〝將〟について―六朝時代を中心に」(『中國語學』八四、一九五九年)は、古代から近世にかけて、「曾・將→爭→怎」と變遷した、と推測する。

●一一四番　白居易「早春　張賓客を招く」「池色溶溶藍染水、花光焰焰火燒春」

○大和八年(八三四)、作者六三歳、洛陽での作(花房・朱・王)。太子賓客分司在任。張賓客とは、同僚の張仲方(七六六―八三七。張九齢の弟、九皋の曾孫。字は靖之)。白居易の「唐故銀青光祿大夫・祕書監・曲江縣開國伯・贈禮部尚書、范陽張公〔仲方〕墓誌銘并序」(巻70)參照。詩は、張賓客を履道里の自宅に招く作。

○〔池〕　履道里の自宅内の池。門前を流れる流水、「狹きこと帶の似き」(「引泉」詩、巻22、後集巻2)伊水の清流を引き入れてあった。その大きさは、宅地十七畝の五分の一(「池上篇」序、巻69)とされるが、「春池に泛ぶ」詩(巻8、後集巻1)には、「煙波六七畝」とある。舟を浮かべて樂しみ、西平橋などが架かり、池をめぐる道も作られていた。池の東には粟稟(穀物倉)、北には書庫、西には琴亭が建つ。(8)

○〔溶溶〕　水を豐かにたたえるさま。『私注』に「水清める貌」、『六注』に「深き形也」、『抄注』に「水ノ清ク湛ヘル貌ナリ」、『集注』に「水の盛なる貌也」とある。白詩には、さらに「渭水は綠にして溶溶たり」(「旅次華州、贈袁右丞」詩、巻5)など三例がある(平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』に據る。以下、『索引』と略する)。

○〔藍染水〕　白居易の「春池の上にて戲れに李郎中に贈る」詩(巻31、後集巻12)に、「直に藍を挼みし新汁の色に似て、君が南宅(愛妾の住むところ?)(9)の爲に羅裙を染めん」(10)とある。これも池の水を藍の色にたとえる。

○〔花光焰焰火燒春〕　「光」は上句の色とほぼ同義互文。「花光」の語は、李白の詩(「上皇西巡南京歌十首」其三)に「花光は上林〔苑〕の紅に滅ぜず」とある。「焰焰」は、『六注』に「赤キ形チナルヘシ。ホノヲ〔炎〕トヨム也」とある。白居易の「落花」詩(五〇番)に、「桃飄りて火燄燄、梨墮ちて雪漠漠」と歌われる上句は、桃の紅い花びらがひらひらと、火のように燃えたちながら舞い散る形容。川口譯に「わが宿の桃李の花々」(『文庫』本では「咲きみちた桃や李の花」)とあるが、李は白い花であり、やや不注意。紅い花の燃えたつさまを焰にたとえる白詩としては、「風は火焰を翻へして人を燒かんと欲す」(「山石榴、寄元九」巻12)、「火樹　風

來りて　絳き焰を翻へす」（「山枇杷」巻17）などがある。

「花の炎が春を燒く（火燒春）」という表現は斬新であるが、白居易よりも少し早い中唐の女流詩人李季蘭（名は冶。？―七八四）の「薔薇の花」の、「摘む時　兼だ恐る　焰　春を燒くを」（「深處最宜香惹蝶、摘時兼恐焰燒春」）ときわめて類似する。このことは、すでに陳文華校注『唐女詩人集三種』（上海古籍出版社、一九八四年）に指摘されている。

○一一五番　白居易「（春を尋ねて諸家の園林に題す）、又た一絶を題す」「遙見人家花便入、不論貴賤與親疎」

○開成元年（八三六）、作者六五歳、洛陽での作（花房・朱）。太子少傅分司在任。白居易の住む履道里周邊、すなわち洛陽城内の東南部は、伊水の清らかな支流を利用した名園の多さで知られた。しかも、安史の亂後、東都洛陽が天子の訪れのない靜かな退老の地と化するなかで、名園の造成は急增する。北宋の李格非『洛陽名園記』[12]、『唐詩の風土』九一頁以下、『長安・洛陽物語』二五四頁以下參照。明の瓊崑玉編『古今類書纂要』巻二、地理部、「園林」の條には、「中に亭臺・池梁・花果有るを園と曰ひ、平地に叢木有る處を林と曰ふ」とある。

白居易の手に成る自敍傳「醉吟先生傳」（巻70）には、「洛城の內外、六七十里の間、凡そ觀寺・丘墅に泉石・花竹有る者には、游ばざる靡し」という。本詩の前に置かれる「春を尋ねて諸家の園林に題す」詩にいう、「天は供ふ　閑日月、人は借す　好園林」と。

○〔便〕その場ですぐに、そのままの意。『助辭辯略』巻四、便の條に「卽なり」とある。

○「花を好む至り」（『考證』）なる態度は、盛唐の賀知章「袁氏の別業に題す」詩に、「主人相識らず、偶坐するは林泉の爲なり」の境地とも通じる。そしてさらには、その典故となる晉の王獻之の故事（名園の持主とは一面識もなかったが、おしかけて傍若無人に庭の批評をした。『世說新語』簡傲篇）を思い起こさせる。

●一二六番　白居易「元が家の履信の宅に過ぎる」「落花不語空辭樹、流水無心自入池」

○大和六年（八三二）、作者六一歳。洛陽での作（花房・朱）。河南尹在任。「元家」は元稹の家、「履信」は洛陽城內の坊（里）名。元稹の住んだ履信里は、白居易のいる履道里の北に隣接していた。元稹は、大和五年（八三一）七月二十

二日、武昌（湖北省武漢市）で沒する。享年五三歳。[13] 本詩は、その翌年の作。白詩「予と微之（元稹の字）とは老いて子無し……」（卷28、後集卷10）の原注には、「微之の履信の新居は、水竹多きなり」とある。

卞孝萱『元稹年譜』四八四頁によれば、履信坊の元稹宅は、大和三年（八二九）、五一歳のとき、妻の父、韋夏卿の舊宅を購入したものである。元稹はかつて妻の韋叢（元和四年〔八〇九〕沒）とともに、その邸宅に假寓したことがある。大和三年、浙東觀察使時代に蓄えた金錢で、當時沒落していた韋家の家屋を買ったのであろう、と推測する。「過」は過訪の意、[14] たずねる、訪れること。

○〔不語〕　柿村『要解』に「不言に本づき、仄字を用ひた」とある。

○〔空・自〕　空は、『六注』に「イタツラト云（フ）義也」、『詩家推敲』卷上に「コレバカリニシテ、他ナキヲ云フ辭ナリ」とある。自は、昔ながらに依然となおの意。この場合、「猶」の語氣に近い。要するに、空・自の二字は、人間社會の混亂や人生の瞬間性をよそに、悠久不變の姿を見せ續ける自然の非情な形容に頻用される。

なお、王鍈『詩詞曲語辭例釋』（增訂本）の「空」（獨・自の意、情態を表す副詞）の條には、劉長卿の詩（「使次安陸、寄友人」）の「孤城盡日空花落、三戶無人自鳥啼」をあげて、空と自は同義互文であるという。さらに、李華の「春行　興を寄す」詩の「芳樹無人花自落、春山一路鳥空啼」などをあげ、靜かな狀態や境地を表す働きをもつとする（一三八頁）。ここも、その一例といえよう。

○〔辭樹〕　『六注』に「辭ハ去ル義也」とある。

○〔無心〕　『白氏文集』では「無情」に作る。「無情」は、悠久な自然の、人事や人生のはかない變轉に對する非情・無情さを表す場合に頻用され、「無心」の語感とはやや異なる。白詩には、さらに「恨み有りて頭還た白く、情無くして菊自から黃なり」（「九日醉吟」卷17）、「獨り溱洧の水のみ有りて、無情　舊に依りて淥し」（「宿滎陽」卷21、後集卷1）など、十七例ある（『索引』）。李白の「殷淑を送る三首」其二には、「流水　無情に去り、征帆　吹を逐ひて開く」とある。ちなみに、蘇軾の「刁同年の草堂」詩には、「青山有約長當戶、流水無情自入池」とあり、後句の文字は白詩と全く同じである。[15]

●一二七番　白居易「春來りて頻りに李二賓客と郭外に同遊

す。因りて長句を贈る」「朝踏落花相伴出、暮隨飛鳥一時歸」

○開成元年（八三六）の春、作者六五歳、洛陽での作（花房・朱・王）。太子少傅分司在任。郭外とは洛陽城外の意。第二句「老を送り春を銷す　嵩（山）・洛（水）の間」によれば、城南に遊んだのである。長句とは七言詩のこと（五言詩は「短句」）。三浦晉『詩轍』巻一、大意の條に、「白詩ニハ、七律ヲ屢々長句ト稱セリ。五律中ニ此稱ナシ。而シテ七言古中ニモ、長句ヲ以テ稱セシコトアレバ、只七言トイフ事ナルベシ」とある。また花房英樹「白氏文集校訂餘錄」（前掲）にも、「當時、『長句』は、七言律詩について多くいわれていたが、白居易は七言であり、八句を越える限り、近體にも古體にも用いていた」と指摘する。

「李二賓客」には、太子賓客分司の職にあった①李紳、②李仍叔を指すとする二説がある。朱金城は、第六句「君は是れ才臣　豈に合に閑なるべけんや」にもとづいて、李二賓客は李二十賓客の奪文と考え、李紳を指すとする（『年譜』二七〇頁など）。[16] 李紳は、白居易と生没年を同じくし、冗談をいいあえる親友であった。顧學頡『白居易集』巻33の校注[17]も同じく李紳とする。花房英樹『白氏文集の批判的研究』（四三二頁）も、李紳と見なすようである。

他方、岑仲勉『唐人行第錄』や王拾遺『系年』は、「李二十賓客」の奪文とする點は全く同じであるが、李仍叔（字は周美）を指すとする。ところが、平岡武夫「三月三日上巳洛濱修禊―白氏歳時記」（日本大學『漢學研究』第十六・十七合併號、一九七八年）は、神田本・蓬左本に據って「李廿二賓客」の奪文であるとして、同じく李仍叔を指すとする。堀部正二編著『校異和漢朗詠集』（大學堂書店、一九八一年）によれば、前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本と岩瀨文庫所藏延慶本には、詩題を「春來與李廿二賓客郊外同遊贈之」に作る。李紳の排行「二十」は、確證があって動かない。つまり、李仍叔の排行は「二十」ではなく「廿二」なのであろう。平岡説のほうがまさる。これは、『唐人行第錄』を補訂する貴重な一資料といえそうである。

○〔一時〕　同時に、一齊に、そろって。『集注』に「李と同じく歸る也」とある。五番に前出。白詩には四十例ある（『索引』）。王鍈『詩詞曲語辭例釋』（增訂本）、溫廣義『唐宋詞常用詞辭典』（內蒙古人民出版社、一九八八年）など參照。

○〔歸〕　『白氏文集』に「還」に作るのが正しい。「歸」では、他の韻（顏・間・閑・山）と合わない。

●一三三番　白居易「元員外の、三月三十日　慈恩寺にて相憶ひて寄せらるるに酬ゆ」「悵望慈恩三月盡[18]、紫藤花落鳥關關」

○元和十二年（八一七）、作者四六歳、江州（江西省九江市）での作（花房・朱）。江州司馬在任。ただし、同年の三月は小の月であり、「三月三十日」はない（『唐代の暦』など）。あるいは「二十九日」の誤りか[19]。

「元員外」は、岡村繁『白氏文集』三（竹村則行執筆）に「名不詳」とするが、金部員外郎の元宗簡を指す。同じ元和十二年作の「書に代ふ」（巻43）に「金部元八員外」と見える人物である（朱『箋校』）。前掲『校異和漢朗詠集』によれば、前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本と岩瀬文庫所藏延慶本の二書は、「酬元八三月卅日慈恩寺見寄」と題する。『私注』『六注』に「元十八」に作るのは、一三七番のそれと混同したものであろう。つまり、「十」は衍字である。なお、この元員外を、川口注（同『文庫』本）や小島憲之「むつかしいかなや古今集」（岩波書店刊『新日本古典文學大系』月報2、一九八九年、第五巻の付録）に「元稹」（排行は九）を指すとするのは誤り。柿村『考證』がすでに誤る。元稹は、元和十年（八一五）三月から元和十三年冬まで、通州（今の四川省）の司馬に在任し（卞孝萱『元稹年譜』、花房・前川『元稹研究』所收の「年譜」）、都長安にはいない。

慈恩寺は五二番の注參照。川口注に「長安の朱雀街にあり」とするのは誤り。慈恩寺のある晉昌坊は、朱雀街（長安城の中央を南北につらぬく、幅約一五〇メートルのメイン・ストリート）とは直接面しない。また寺の建立を「六四六（唐貞觀二十）年」とするのも誤り。「六四八（唐貞觀二十二）年」に訂正しなければならない。さらに「西塔六級、高さ三百尺」も不適切。白居易の生存した當時、すでに七級であった（『文庫』本もみな同じく誤る）。これがいわゆる大雁塔である。一説に、十層であったともいう。

○〔悵望〕　思いきれず、遠くを眺めやる。なごり惜しく眺めやる意。白詩の頻用語（さらに二二例ある。『索引』）。南齊の謝朓「新亭の渚にて范零陵に別るる詩」に、「驂を停めて我悵望す」とある（『文選』巻20）。

○〔三月盡〕　白詩に八例現れる詩語。平岡武夫「三月盡―白氏歳時記」（前掲）にいう、

平安の歌よむ人たちに三月盡の言葉を教え、やよひのつごもりを歌にさせたのは、白居易のようである。彼らは直接に『白氏文集』から、あるいは間接に『白氏文集』を引

く詞華集から、この題材を汲み上げたようである。いや、正にそうにちがいない。というのは、この言葉、そしてこれを詩に表現することは、まさしく白居易の獨壇上なのである。彼はしばしば三月盡をいう（八例の詩句は省略）。

白居易がこうして三月盡をしきりにいうのに反して、彼と共に並べ稱せられる唐の代表詩人、李白・杜甫・韓愈らの作品には、三月盡の言葉はついに用いられていない。もとより『文選』の言葉ではない。白居易の詩の相手である元稹はどうか。その詩にも三月盡の言葉はない。[20]

同論文はまた、

三月盡をいう白居易の詩は、しばしば「日西」「日斜」「日暮」「日晩」「黄昏」「晩來」「西日」「落照」などの言葉を伴うて、惜しむ心をせき立てる。

三月盡という言葉は、わが春が盡きるということを、當時の人人に强烈に意識させ、激しく感情をゆさぶるものであった。

とも指摘する。

○〔紫藤〕　この二字は、宋版以下、「紫桐」に作る。この點について、神田喜一郎「酒井宇吉氏藏　佚名唐詩集殘卷、白氏長慶集卷第廿二」解説（『舊鈔本叢說』）[21]にいう、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂㈢（植木）

第六紙「酬元八員外三月卅日慈恩寺相憶見寄」の「紫藤花落鳥關々」の「藤」の字を、宋板以下はともに「桐」に作つてゐる。しかし同じく慈恩寺に關する詩である第一紙の「三月卅日題慈恩寺」にも「紫藤花下漸黄昏」とあつて、この方は諸本ともに差異がない。さらに千載佳句や和漢朗詠集に採られてゐる紫藤花落の句も同じであり、東大寺圖書館所藏の文永十一年（一二七四）宗性書寫の白氏文集要文抄にも「藤」に作つてゐるので、白氏の原形は「藤」であつたと考へるべきであらう。

他方、「紫桐」の文字を原形と見なす說がある。柳瀨喜代志「和漢朗詠集異文考」（『中古文學と漢文學Ⅱ』汲古書院、一九八七年）には、次のごとくいう、

『白氏長慶集』卷十三「三月三十日題慈恩寺」の「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黄昏」に見られる慈恩寺の藤のイメージに引かれた訛傳か。あるいは景の書きかえか。『枕草氏』「木の花は」の段に明らかなように、桐の花は平安朝人の美の對象となっていなかったことが、その背景にあろう。

小島憲之「むつかしいかなや古今集」（前掲）にも、いう、

「紫藤」を諸本「紫桐」に作る。これは白居易自らの改

作か、書寫者の改作誤記か、未詳であるが、朗詠するうちに「桐」が「藤」に變ったのかも知れない。

ところで、この文字の異同について、平岡武夫「白居易と寒食・清明」（『東方學報』京都・第四一册、一九七〇年）は、きわめて注目すべき發言をする。桐の花は、三月上旬の節氣「清明節」（二十四節氣の一）に咲く花であり、三月盡の花ではない（白詩「桐花」「答桐花詩」）と。そして次のごとくいう、

宋本・馬本・汪本・全唐詩本、そして高麗本・那波本も、すべてが「紫桐花」に作る。しかし三月三十日、彌生つごもりをいうのに、たとえ落花であるにしても、この清明の花を點出することは白居易らしくない。果せるかな、日本の舊鈔本は、宗性の抄本も蓬左文庫の校する本も「紫藤花」に作る。紫藤花は「三月三十日題慈恩寺」に「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黄昏」というように、まさしく「三月盡」の花である。白居易の季感と季語の使い方は、俳句におけるが如く確かである。

筆者は、平岡説こそ説得力をもつと考える。神田・平岡説にしたがって、「紫藤」こそ『白氏文集』の原形と考えるべきであろう。

○〔鳥關關〕　關關は、『詩經』周南「關雎」の毛傳に「和聲なり」とある。『六注』には、「頻ニ鳴ク事也」という。白詩にはもう一例、「何物か我を呼び覺ます、伯勞（もず）聲關關たり」（「春眠」卷6）がある。平岡武夫「三月盡」（前掲）に、「藤の花が咲いて散りこぼれるころ、そこに飛んで來て關關とよろこび鳴く鳥は何であろうか。おそらくは子規か」とする。しかし、この推測は穩當ではない。唐詩の世界では、子規（杜鵑）は長江中流域を中心とした南方の鳥である。詳しくは、拙稿「ほととぎすのうた—杜鵑と郭公をめぐって」（『比較文學年誌』〔早稲田大學〕第一五號、一九七九年）、「唐詩に詠まれた南北の風土—傳統的世界觀と南北二分法の視點を通して」（弘前大學人文學部特定研究報告書『文化における「北」』、一九八九年）參照。ちなみに、『私注』には「關關は、鶯の鳴く貌なり」（『抄注』も同じ）という。必ずしも鶯に限定できないが、子規よりはよい。

●一三七番　白居易「元〔十〕八の溪居に題す」「晚藥尚開紅躑躅、秋房初結白芙蓉」

○元和十一年（八一六）、作者四五歲、江州での作（花房・朱）。江州司馬在任。「元八」は、江州で知りあった友人、河

南の「元十八」（元集虚）の奪文であり、當時、都長安にいた「元八」（元宗簡）のことではない。『私注』『六注』では、正しく「題元十八溪居」に作り、さらに『校異和漢朗詠集』によれば、前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本と岩瀬文庫所藏延慶本も「元十八」に作る。このことは、すでに柿村『考證』や、岑仲勉『唐人行第錄』（前掲）四、五頁、朱『年譜』八三頁などに指摘される。川口『文庫』本も、岩波・大系本の誤りを自ら訂正する。ところが、岡村繁『白氏文集』三（竹村則行執筆）は「元八」（名は宗簡）に作るのが正しく、後引の白詩「題元十八溪亭」の「十」を誤りと見なす（三八四頁）。その説の論據は未詳であるが、贊同できない。なお、大曾根本の「典據一覽」に「元八が溪居に題す」として、その脫字を指摘しないのも不親切である。

元集虚[22]は、朱『箋校』に引く『廬山志』卷九にいう、「河南の人。貞元・元和の間、地を避けて廬山に來りて、相辭澗（石牛山の南—朱金城の説）に居る。白樂天、江州に在りし時、常に與に往來す」と。白詩「元十八の溪亭に題す」（卷7）の原注に、「亭は廬山の東南の五老峰下に在り」とあり、「君が石溪亭に宿すれば、潺湲として聲（水聲）耳に滿てり」と歌う。ちなみに、五老峰付近は著名な隱棲地であった。『唐才子傳校箋』卷五、楊衡（六五七番の作者）の條參照（中華書局、一九八九年刊第二册）參照。

○〔晚藥〕　『六注』に「春ノ暮ノ花ナル故ニ云（フ）」とある。藥は雄しべ・雌しべを指すが、ここでは花の意。『白氏文集』に「晚葉」に作るが、「藥」のほうが優るようである。

○〔躑躅〕　ツツジ・サツキの類。山石榴・石榴・杜鵑花・山躑躅ともいい、杜鵑の啼血によって紅く染まった花のイメージをもつ。拙稿「ほととぎすのうた—杜鵑と郭公をめぐって」（前掲）參照。『六注』には、その名の由來を、「羊ハ、ツツシヲ食シテ、必スフシマロンテ死ス。此レ羊ノ毒葉也。故ニフシマロブト讀（ム）也」と説明する。躑躅は一般に「初夏の花」（川口注）ではなく、『六注』に指摘されるごとく、晚春に開くべき花であった。たとえば、同年作の白詩「山石榴、元九（稹）に寄す」詩（卷12）に、「九江三月　杜鵑來る、一聲催し得て一枝開く」とある。『新釋』にいう、「もと晚春初夏の候に花開くものなれど、山間の谿谷にありて遲れて開ける花なれば、晚藥尙開といへり」と。

○〔秋房初結…〕　秋房の房は蓮房（落花後の、蓮の實を含む蜂の巢狀の外包〔花托〕、轉じて、蓮の實の意）、川口注に「秋

の花ぶさ」（『抄注』も同じ）とするのは誤りである。陶淵明「雜詩十二首」其三に、「昔は三春の蕖爲りしに、今は秋の蓮房と作る」とあり、白詩「曲江　秋に感ず二首」其二（巻11）にも、「蓮（の花）落ちて青房（青黒い蓮の實）露はる」と歌われる。[23] この意味で、『六注』の「蓮花ハ秋實ナル。故ニ秋ノ房ト云ヘリ」とあるのが正しい。佐久注、顧學頡・周汝昌『白居易詩選』（人民文學出版社、一九八二年再版）、馮兆平・胡操輪『廬山歷代詩選』（江西人民出版社、一九八〇年）、梁鑒江『白居易詩選』（廣東人民出版社、一九八六年）、岡村繁『白氏文集』三などは、いずれも蓮房（蓮蓬）・蓮の實（蓮子）の意にとる。

ところが、川口譯は「秋の花である白い蓮華がもうはやつぼみをふくらませている」（『文庫』本もほぼ同じ）とし、大曾根譯も「秋の花である白い蓮華が早くも蕾をふくらませている」とする。この誤譯の原因は、『考證』の誤り（「秋房は秋季の花なり。房は花ぶさなり」）にもとづくらしい。蓮の花は、色の紅白に關係なく、一般に夏に咲く水花とされる（拙著『唐詩歲時記―四季と風俗』一二九頁以下參照）。また川口・大曾根譯は、「初」の字をそれぞれ、「もうはや」（『文庫』本では「早くも」）、「早くも」と譯すが、いずれも誤り。この「初」字は、ものごとの發端にさかのぼって述べる副詞、「いましもようやく……したばかり」の意である。

ちなみに、柳瀨喜代志「和漢朗詠集異文考」（前掲）には、『白氏文集』との文字の異同を考慮していう、

「葉」字を「蘂」字に作るのは、書體字類似による訛傳か（『倭漢朗詠集考證』説）。あるいは、「紅躑躅」の「蘂」と「白芙蓉」の「房」、花の咲ける春と秋の敍景の對句を意圖して改めたものか。本詩は躑躅の紅葉と芙蓉の白い花を素材に秋の美景を述べて挨拶とした詩。

この考説も、房を花とする誤りを犯す。また上句を春、下句を秋とする説にも從いがたい。平地にくらべて涼しい山中の秋景の特色を捉えた對句、と見なすべきであろう。筆者は、通行の「晚葉」より、『和漢朗詠集』の「晚蘂」のほうが、白詩の原形に近いのではないかと愚考する。杜甫の「鄭廣文に陪して何將軍の山林に遊ぶ十首」其四にも、「疏籬　晚花を帶ぶ」とあり、清の施鴻保『讀杜心解』巻二に「蓋し花の遲く開きし者」と注する。晚蘂は、この晚花と同義語である。

●一四四番　白居易「早夏　曉に興き、夢得に贈る」「背壁

燈殘經宿焰、開箱衣帶隔年香」

○開成三年（八三八）、作者六七歳、洛陽での作（花房・朱）。太子少傅分司在任。夢得は劉禹錫の字。劉禹錫は當時、洛陽で太子賓客分司に在任する（卞孝萱『劉禹錫年譜』など）。「興」は起床の意。『詩經』小雅「小宛」に「夙に興き　夜に寐ぬ」、陶淵明「園田の居に歸る五首」其三に「晨に興きて荒穢を理む」とある。洛陽城内の履道里の自宅での作。更衣を行なう立夏の日の作であろう。

○〔背壁燈〕　(a)燈の光を壁の方に向けて暗くする、(b)燈を壁の背後に移してほの暗くする意。二七番の注參照。『抄注』に「光ノ方ヲ壁ニ向フル也」とあるのは、(a)の立場である。川口注に「光をこちらにむけ、壁の方へ背をむけること」と注し、「壁の方に背をむけた燈火」（『文庫』本も同じ）と譯する。大曾根譯も「壁の方を背にした燈火」とするが、再考を要する。とくに傍點を付した箇所は理解できない。光の向きが全く逆になろう。

ちなみに、村上哲見「燭背・燈背ということ―讀詞瑣記」（前掲）には、ほぼ次のごとくいう、

背燈とは、殆んど常に寢につくとき、もしくはすでに寢についているときについて用いられる。ともしびをとばりのかげにおき、うすぼんやりしたあかりの中に寢につくという光景は、中晩唐期の爛熟した都會文化における生活にふさわしい。中唐以後では、少くとも詩を作るほどの文人たちの生活ではあかりをともしたまま寢るのが習慣であったようだ。

○〔殘〕　留の意。白詩「東樓の曉」（卷11）に、「宵（夜の意）燈　尚ほ焰を留む」とある。

○〔宿〕　『六注』に「一夜也」とある。

○〔開箱衣帶…〕　白詩「閑居して春盡く」（卷33、後集卷14）に「箱を開いて試みに著く　舊生衣（着ふるした夏衣裳）」とあり、同「秋に感じて意を詠ず」（卷35、後集卷16）に「又た生衣を脱ぎて熟衣を著る」とある。つまり、この衣は生衣、和訓は「すずし〔生絹〕のきぬ〔衣〕」で、冬に着る「熟衣」に對する言葉。慈周『葛原詩話』卷一、生衣・熟衣の條に引く蕉中師（釋大典）の言葉に、

生熟ハ、ネルト、ネラヌトナルベシ。凡ソ單〔ひとえ〕ノ衣ハ、多クネラヌヲ用ユ。禪家ノ紗袗・布袗ノ類、コレナリ。

とある。絹を練るとは、「纖維中に含有する膠質およびその他の雜物を除去して、布地をしなやかにし光澤を豐かにする

ため」に行なう動作（渡部武譯注『四民月令—漢代の歳時と農時』平凡社・東洋文庫、一〇一頁）。ただし、生衣は穀や紗の夏衣裳だけでなく、麻や葛の短衣をも含むようである。帷子の類。

●一四七番　白居易「薔薇正に開き、春酒初めて熟す。因りて劉十九・張大夫・崔二十四を招きて、同に飲む」「甕頭竹葉經春熟、階底薔薇入夏開」

○元和十三年（八一八）の初夏、作者四七歳、江州での作（花房・朱）。江州司馬在任。白居易の住んだ江州の官宅は、潯陽城（九江市）の西門外にあって、湓浦口に近く、しかも長江に臨む幽靜な場所にあった（王拾遺『白居易傳』一四一頁参照）。「薔薇」は、本詩の第三句「火の似き淺深　紅は架を壓す」によれば、階（中庭から堂にのぼる階段）前の架に一面にはわせた鑑賞用のバラである。高駢「山亭夏日」詩の「滿架の薔薇　一院香し」は、とくに著名である。松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』一八〇頁（大修館書店、一九八七年）参照。「春酒」は、寒い冬にしこみ、春に醱酵したばかりの新酒をいう。

劉十九は、名は未詳。十九は排行。嵩陽の處士（『唐人行第錄』一五八頁）。江州滯在中の酒友・碁敵。顧學頡・周汝昌『白居易詩選』や顧學頡「白居易年譜簡編」（『白居易集』第四册所收）などに、劉軻を指すとするのは誤り。朱『箋校』一〇七五頁の考證参照。張大夫の「夫」は衍字、大は排行第一を指す。名は未詳（朱『箋校』も言及せず）。崔二十四は、崔咸、字は重易（『唐人行第錄』一〇八頁以下）。『舊唐書』卷一九〇下、文苑傳の崔咸傳など参照。白居易は、弟（白行簡）の死後、その作品集の序文執筆を依頼している。大和八年（八三四）沒。白居易に「崔常侍を祭る文」（卷70）がある。[25]

○〔甕頭〕當時、甕のなかで酒を釀し、蓄えた。『六注』に「頭リトハ、大瓶ノ中ト云（フ）義也」とある。「頭」を中の意にとる。六六番の注参照。ただし、甕頭の語は、通常「できたての新酒を入れた酒がめ」のイメージを持つらしい。唐の張彥遠編『法書要錄』卷三に收める唐の何延之の「蘭亭記」には、「初めて熟せし酒」を江東では「堈（一作缸）面」、河北では「甕頭」というとする。本詩を含めた白詩五例のうち、少くとも四例は合致するようである。このことは、慈周『葛原詩話後篇』卷三に指摘され、西村富美子『白樂天』（角川書店、一九八八年）も、「甕頭」を「かめの意。釀[24]

されたばかりの新酒を入れたかめ」と注する（二六九頁）。ちなみに、白居易「微之に與ふる書」（巻45）に「江酒（江州の酒）極めて美し」とあり、同「首夏」（巻10）にも「潯陽（江州）は美酒多し」と歌う。これは、中唐の李肇『唐國史補』巻下「敍酒名著者」の條に、唐代の名酒の一つとして潯陽の溢水」をあげることと符合する。

○〔竹葉〕『六注』に「酒ノ美名也」とあり、江戸末期の山田信義『翠雨軒詩話』巻二、竹葉の條には、「酒トイハズシテ竹葉ト用タル」例として、本詩句をあげる。「竹葉」は本來、固有名詞（大曾根注參照）。ここでは美酒の代稱である。もちろん、「薔薇」に對する對を意識した表現でもあろう。川口注に「酒をかもす時、竹葉をなかに入れると清潔にみえるところから、酒を竹葉ともいう」[26]（『文庫』本も同じ）とあるのは誤解である。このことは、白詩「錢湖州〔徽〕は箬下酒を以て、李蘇州〔諒〕は五酸酒を以て、相次いで寄せ到る。……」（巻20）に、「傾くれば竹葉の如く　樽に盈ちて綠なり」とある句によって明瞭である。青みがかった酒の色から竹の葉にたとえたもの。

篠田統『中國食物史』（柴田書店、一九七四年）一〇一頁にいう、

酒の仕込は、いそげば七月（以下勿論舊暦）にも仕込むが、氣溫が高いから餘り良い酒はできない。理想は九月九日重陽の日に仕込むので、初冬の聲をきけば次の冬酒にかかる。したがって、搾るのは花見酒から初夏にかけてが盛りで、早い正月酒もある譯だ。

この酒がふつう綠酒とよばれ、……本當に綠色の酒があるものだろうか。漉し方があらいので粕が浮いていて、丁度春の池水に藍藻がわいた時みたいに青綠色に感じられたものと思われる。それがもっと青くなると、日本語の酒機嫌の語原なる「竹葉」に比せられるわけだ。

また、同『中國食物史の研究』（前掲）「中世の酒」の條には、まず唐詩の綠酒の用例をあげ、「酒色のミドリというのはクサ色というよりも、青みがかった malachite green、染めやの「青竹」色とみてよさそうだ。されば、酒色はしばしば竹の葉にたとえられる」と指摘する。他方、青木正兒『抱樽酒話』「六　琥珀の光」（『青木正兒全集』〔春秋社〕四二、三頁）にもいう。

唐代、酒の色は淡黃色が普通であるが、特殊なものとして綠・紅・白の三種があった。綠酒は唐人の詩に多く、唐の李咸用の「短歌行」に「一尊（樽）ノ綠酒　染メシ於モ

綠なり」（『全唐詩』巻六四四）とある。

ちなみに、今井清「白樂天の詩に見える酒について（上）」（『大東文化大學紀要』第二一號〔人文科學〕、一九八三年）にはいう、

アルコール度は、平岡〔武夫〕教授の説によれば、僅かに三度である。日本酒十六度以上に比べて、いかに弱いかが分ろう。わが國で雛祭りに女の子が飲む甘酒と同程度だと思えばよい。

○〔經春熟〕　白詩「閑居して春盡く」（前掲）にも、「甕を揭けて偸かに嘗む　新たに熟せし酒」とある。

○〔階底〕　階は中庭から堂へのぼる階段。「もと」[27]と訓じる「底」には、裏・下・前・邊などの意がある（張相『詩詞曲語辭匯釋』巻一、底(4)の條）。ここは、階前・階邊の意であろう。

〔注〕

(1)　ただし、杜甫の詩に見える巫峽は、三峽の總稱、もしくは三峽の代表として多用される。嚴耕望『唐代交通圖考』第四巻、一一二五、六頁參照。

(2)　神女を夢みたのは、じつは楚の懷王と宋玉の二人であり、襄王とは全く無關係であるとされる。梅原郁譯注『夢溪筆談』三（平凡社・東洋文庫、一二一頁）參照。

(3)　嚴耕望『唐代交通圖考』第四巻に收める圖十五「唐代渭水蜀江間山南劍南區交通圖」參照。

(4)　種村箕山『詩學辨髦』巻下、似の條參照。

(5)　津阪孝綽『夜航詩話』巻四には、「紛も亦た必ずしも白を謂はず。轉じて花の豔麗を稱す」として、本句などをあげる。

(6)　原田淑人『古代の人化粧と裝身具』（刀水書房、一九八七年）や、前掲の志田論文、孫機「唐代婦女的服裝與化粧」（『文物』一九八四年四期）、周汛・高春明『中國歷代婦女妝飾』（三聯書店〔香港〕、一九八八年）「黛眉藝術」の條と、同書一二九頁の一五七番の圖など參照。

(7)　劉堅「校勘在俗語詞研究中的運用」（『中國語文』一九八一年六期）參照。

(8)　『白居易家譜』（中國旅游出版社、一九八三年）に收める「履道里第宅記」も參照に値する。

(9)　佐久注の説に據る。

(10)　白居易「憶江南詞三首」其一（巻34、後集巻3）に、「日出江花紅勝火、春來江水綠如藍」とある。

(11)　王鍈『詩詞曲語辭例釋』（增訂本）一一九頁に、「兼、有〃頗〃、〃甚〃義」とある。

(12)　陳植・張公弛『中國歷代名園記選注』（安徽科學技術出版社、一九八三年）がすぐれる。

(13) 拙稿「唐代詩人新疑年錄㈠」(弘前大學人文學部『文經論叢』第二三卷三號、一九八八年) 參照。

(14) 小島憲之『王朝漢詩選』(岩波文庫) 四八頁には、「一般に舊跡、廢墟などを訪れて感慨にふけるなどの詩題によく用いる語」とある。

(15) 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第三册 (筑摩書房、一九八六年) 二二四頁參照。ただし、この指摘を缺く。

(16) 拙稿「唐代作家新疑年錄㈢」(『文經論叢』二五卷三號、一九九〇年) 參照。

(17) 「按、原本「二」下脫「十」字、今補。李二十、卽李紳、集中屢見」とある。

(18) 西村富美子『白樂天』(前揭) に、本句を「慈恩に悵望すれば、三月盡き」と讀むが、誤讀であろう (一九七頁)。

(19) 元和十年は大、十一年は小、十三年は大、十四年は小の月である。

(20) 同論文は續いていう、「但だ「望驛臺」の題下に「三月盡」と注をしている。この詩は實は白居易と緊密に關係しているのである。この詩は彼の『東川卷』二十二首の一つ。この詩卷を彼は白居易の弟の行簡に手寫してもらっている。しかも白居易に同じ題の和詩 (0767) がある。はじめから白居易を意識して作られているのである」と。

(21) 同朋舍出版刊『神田喜一郎全集』第三卷所收。

(22) 元集虛は、元和十三年 (八一八) の夏、廬山を出て、桂管觀察使裴行立の幕府へ赴く。『系年』一一七・一二五頁參照。

(23) 明の馬元調本を底本にした朱『箋校』は「秋芳」に作り、その校記にいう、「『芳、宋本・那波本・汪本俱作『房』、全〔唐〕詩注云、『一作〈房〉』」と。おそらく馬本や『全唐詩』の「芳」は「房」の形訛であろう。

(24) 平岡武夫・今井清校定『白氏文集』第一册に、「大下、各本有夫字。金澤本、大夫二字係校補。而夫字下云、異本無。盧〔文弨〕校云、夫字疑衍。當是」とある。顧學頡校『白居易集』や朱『箋校』も同じく衍字と見なす。

(25) 西村富美子『白樂天』(前揭) に、この三人の傳は不詳 (二六九頁) とするのは、やや輕卒である。少くとも崔咸の傳記はかなりわかる。

(26) 『新釋』によれば、『尺牘双魚』(明の熊宣機輯) の注に見える說らしい。

(27) 『私注』に「モト」と讀む。